

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 20 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510288

研究課題名（和文） ハラスメントや性差別を生み出す各学問分野の構造分析

研究課題名（英文） Subculture of Research and Academic Harassment

研究代表者

北仲 千里 (Kitanaka Chisato)

広島大学・ハラスメント相談室・准教授

研究者番号：60467785

研究成果の概要（和文）：

共著の学術論文は、不正行為やハラスメントの背景となる可能性がある。また、日本の慣習としての著者の決め方（オーサーシップ）と、グローバルな著者基準との板挟みとの中の葛藤が生じていると考えられる。自然科学系のトップ 15 大学の教員 3000 人にアンケート調査をしたところ、回答者の論文に記された著者の 14.1%しか、いわゆるグローバルな基準には当てはまらなかった。また、回答者の 38.8% がこれまで「ギフト・オーサーシップ」（貢献がないのに名前が載ること）や 27.7% が「ゴースト・オーサーシップ」（貢献したのに名前が載らないこと）を経験していると答えた。

研究成果の概要（英文）：

In the fields of natural sciences, academic papers with multiple authors are common. Our concern is that having large numbers of authors can create confusion about responsibilities and even amount to misconduct. We conducted a questionnaire survey of natural scientists serving as faculty (excluding medical faculty) at 15 top Japanese universities. Analysis of the 988 questionnaires returned (response rate 32.9%) revealed that 14.1% of the researchers actually met the global criteria of authorship. Among all respondents, 38.7% reported “gift authorship” on their paper and 27.8% reported not acknowledging “ghost authorship.”

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：アカデミック・ハラスメント、性差別、科学技術

1. 研究開始当初の背景

「アカデミック・ハラスメント」が社会問題化しつつあるが、学術的研究は緒についたばかりである。アカデミック・ハラスメントに特有の困難は、その被害が、高度に細分化された専門領域に特有の制度的文化的文脈に

かりである。アカデミック・ハラスメントに特有の困難は、その被害が、高度に細分化された専門領域に特有の制度的文化的文脈に

依存して形成されている点にある。ハラスメントの発生を防止し、問題が起きた場合の解決をはかるという観点からも、それぞれの研究者、院生学生がどのような研究の世界に生きているのかを理解していくことが必要である。中でも、自然科学領域では特に深刻な被害が多数報告されながら、その被害の実態や背景が外部者には理解されづらいといわれ、その解明が求められる。

2. 研究の目的

複数の異なる研究分野の研究生活について調査し、各分野間の「常識」の乖離を明らかにし、またそれがハラスメント被害やアカデミズムのジェンダー構造に与える可能性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 自然科学系研究者に対するインタビュー調査（自然科学系研究者 18 人および研究倫理・科学研究の専門家 1 名）

(2) 海外の研究上の不正行為や研究発表のオーサーシップをめぐる議論と実証的研究などの先行研究のサーベイ、および日本学術会議委員の自然科学系研究者の研究業績からみる研究発表のスタイルのサーベイ

(3) 日本の自然科学系研究者 3000 人を対象としたアンケート調査

4. 研究成果

(1) インタビュー調査と文献研究により、以下のような自然科学系特有の研究文化が認められた。①グローバルな競争の中で成果を出すことを求める強い圧力、②業績がインパクトファクター等の指標で客観的に測られている状況、③共同研究や共著というスタイル、④設備や資金の重要性、⑤民間企業とのかかわり、⑥研究を補佐する「手足」「兵隊」の必要性、⑦時間の拘束、⑧特許などの知的財産、⑨特有の倫理観や研究者観などである。

(2) 共著論文の際のオーサーシップの問題は、世界的にも議論になっているが、それに加え、研究領域特有の慣習や小講座制研究組織など日本特有の状況もハラスメントと関係しやすい状況があるのではないかという示唆が得られた。

すなわち、自然科学系の研究の遂行には実際に多くの人が関わることが必要であり、ま

た多機関共同の研究も多い。その時「実際に働いた者」をどこまで入れるべきか、という問題が浮上している。

これは、いわゆる「ギフト・オーサー」や「ゴースト・オーサー」問題として現れている。ギフト・オーサーとは、研究室の主宰者・指導教員は資金や施設設備を提供するだけで、実際に研究に携わらなくても、「著者」となり業績になるという現象である。地位が高くなると業績は自動的に増え、主としてラスト・オーサーなどの順位を得る傾向がある。これが、「ボスと意見が違ふと“発表するな”“研究するな”などの嫌がらせをうける」「貢献していなくても共著に入れるという圧力がかかる」等のハラスメントや研究不正の悩みと絡まりあって生起している。また、「共著者であること」を用いた様々な嫌がらせも存在する一方で、著名な科学者が著者に入ることによる「威光効果」によって掲載されやすく、単著論文は評価されにくいという被害があるとも言われている。さらに、「著者順位」に関わる問題もある。若手の研究者は「自分がやった研究なのに、ファースト・オーサーを上司（指導教員）にとられてしまう」「貢献の程度と著者順位に矛盾がある」といった不満として現れる。

日本学術会議委員を務める自然科学系研究者の業績をサーベイする限りでも、著者数やオーサーシップのあり方に、分野別に特徴の違いがあることや、ある地位にある研究者は、ラスト・オーサーとしての業績が多い傾向にあることが認められた。

こうした問題に関して、日本では行われていないが、英米ではオーサーシップの実態についての実証研究もおこなわれている。また、国際基準の確立の動きのなかで著者になれる条件を狭く厳しくしようという方向性があり、同時に、著者には入れないが「コントリビューターシップ」を確立すべきだという議論も出ていた。

(3) 自然科学分野（医学系除く）で論文生産性が高いとされる 15 大学の教員職にある研究者 3000 名を対象にアンケート調査を実施した（郵送法・自記式 2011 年 6 月 17 日発送、リマインダー無、回答数 988、回収率 32.9%）。

アンケート調査では、①研究スタイルと業績のスタイルについて②過去五年間の業績の中で1つをあげてもらい、その業績のオーサーシップについて（著者数、各著者の貢献内容）③オーサーシップの不正に関する経験や意見、④研究規範や研究者観、⑤自分が研究者として育ってきた中での指導教員や研究室の環境、ハラスメント経験などについて訊ね、属性（世代、職階、性別、海外での研究経験）や研究分野、研究スタイルなどによって回答に違いがあるかどうかの分析を行った。

アンケート調査の結果、①研究スタイルとしては、「大型機器や装置が不可欠」が7割強、「外部資金が不可欠」が8割強、「企業との連携」は3割、研究室タイプでは、いわゆる小講座制タイプが4分の3、研究室レベルでの研究費は1000万円以上が4割強、業績は論文が9割、うち共著者論文9割、英語論文9割であり、領域による発表スタイルの違いがみられた。

②回答者の業績のうち、共著論文に記された著者のうち14.1%しか、いわゆるグローバルな基準には当てはまらなかった。「グローバルな基準」とは、医学雑誌編集者国際委員会 (International Committee of Medical Journal Editors: ICMJE) が作成した統一投稿規程 (Uniform Requirement) という生物医学雑誌における出版の倫理原則のことであり、現在ではこれに準じた原則が、「Science」「Nature」などの総合科学雑誌をはじめ、多くの海外の自然科学系の学術雑誌の投稿規定に採用されていると言われている。その投稿規定では、「著者は、投稿原稿の少なくとも一部に責任を負うとともに、それぞれの原稿構成部分の責任者を特定できなくてはならず、理想的には、共著者の能力や信頼性にも確信をもっているべきである。」とし、著者として認められるためには、「①構想およびデザイン、データ取得、データ分析および解釈において貢献した、②論文作成 または重要な知的内容に関わる批判的校閲に関与した、③出版原稿の最終承認を行った、以上3点すべてを満たさなくてはならない。」とされている。これまで、アメリカ、イギリスな

どの研究でも、グローバルな基準に入らない著者が混じっていることが指摘されていたが、4分の3の回答者が海外雑誌に論文を掲載しているにもかかわらず、今回の調査でもICMJEの統一投稿規程と比較して大きくずれている実態があることがわかった。

③回答者の38.8%がこれまで「ギフト・オーサーシップ」を経験し、27.7%が「ゴースト・オーサーシップ」を経験していると答えた(表1)。

(表1)

あなたは、これまでの研究生活の中で、次のような体験をしたことがありますか。

(複数回答)

- ・実際に研究にかかわっていないけれど、共著者に名前が入っている人がいた。
383人, 38.8%
- ・実際に研究にかかわっていないけれど、自分が共著者に含まれていた。153人, 15.5%
- ・研究に参加していたにもかかわらず、自分が共著者に入らなかった。274人, 27.7%
- ・自分が研究で重要な役割を果たしたにもかかわらず、ファースト・オーサーなどのふさわしい順位にならなかった。
143人, 14.5%
- ・実際に研究成果が出ていたにもかかわらず、発表の許可が得られなかった。
63人, 6.4%
- ・やりたくない研究テーマだったのに、研究に関わる作業をさせられた。98人, 9.9%
- ・追求したい研究テーマがあったにもかかわらず、それに取り組むことが許されなかった
109人, 11.0%
- ・上記のような経験はない。27人, 2.7%

また、「実際に研究にかかわっていない人が、共著者に名前が入ることについて、あなたはどう思いますか」と尋ねたところ、多くの人は「問題」と答えているが、「場合によっては問題」とする人も多い(表2、表3)。自由記述でも「研究者として当然の倫理であろう」というものがあったが、「研究にほとんど実際的にタッチしなかった場合でも、研究環境と資金の準備での貢献度があるのなら、載ることもあるだろうと思う。」「研究にかかわる」の定義、度合いによるのでなかなかむ

ずかしい」研究を「やらせてくれた」、場所 (office) を「使わせてくれた」ということで感謝して、業績で恩返しする、という発想です。とくに「やらせてくれた」は無形の貢献です。」などの記述も多数見られ、統一的なルールが共有されていないことがうかがえた。

(表2)

実際に研究にかかわっていない人が共著者に名前が入ることについてどう思いますか。		
	人	%
明らかに問題	446	45.1
場合によっては問題	449	45.4
あまり問題ではない	72	7.3
問題ではない	5	0.5
無回答	16	
合計	988	

(表3)

そう考えた理由として当てはまるものに○をつけてください。(複数回答)	
・ 著者に入れずに謝辞で十分である	437人 (44.2%)
・ 人間関係上入れないと支障がある	176人 (17.8%)
・ 広く行われている慣習である	128人 (13.0%)
・ 国際雑誌の投稿規程と日本の現状にずれがある	102人 (10.3%)
・ 指導教員や研究チームのボスが誰かがわかるのでむしろ必要である	95人 (9.6%)
・ 入れるように指示されることがある	92人 (9.3%)
・ 共著者が著名である場合、投稿の際に有利に働く	67人 (6.8%)

回答者のうち、約45%の人が、1年以上の海外での研究歴を持っていたが、海外経験の有無はこの問題の認識には影響していなかった。また、海外ではコントリビューターシップが議論になっているが、少なくない人が、「下働き」層をファースト・オーサー以外の順位で著者にいれており、この問題についての態度はアンビバレントであることがわかった。

③研究規範や科学観、研究者観について調査するために、(i) 集団主義的規範、(ii) 成果主義的規範、(iii) 科学的普遍性に対する信

頼、の3パターンを取り出して分析した。

(i) 集団主義的規範

自然科学研究のチーム性を示すもので個人の自由な研究活動と相反する規範であるものとして、以下の設問を訊ねたが、全体に肯定的であった。「所属する研究組織(研究室や研究グループ)で行った研究の成果は、個人のものではなく組織のものである」「研究室のメンバーは、自分のやりたい研究よりもボスの研究の手伝いをするを優先するべきだ」「学生の指導は、その学生が所属する研究室全体で行われるべきである」。ただ、「自分の研究よりボスの研究優先」という規範への支持は低かった。回答傾向に年齢、性別、職位による差は無く、研究領域では薬学、農学系、生物学系で高い傾向があった。

(ii) 成果主義的規範

自然科学研究領域では、研究のグローバル化が進み、国際的な競争に晒される傾向が強い。また、外部資金の獲得が必須となっているが、それらのことが成果主義的規範という形での程度共有されているかを以下の設問で訊ねた。「研究者として評価されるには、私生活を犠牲にすることを求められる。」「研究者は新しいアイデアを追究し、新規性ある研究を目指すことが大切である。」「研究者はできるだけ早く成果をだし、発表するよう心がけるべきである。」

成果主義を肯定する回答は全体的に高かったが、特に生物学系、農学系で高く、数学、土木・建築で低い傾向があった。

(iii) 科学的普遍性に対する信頼

アカデミック・ハラスメント問題は、教育・研究の場における権力作用と深く関わるため、科学的普遍性への信頼という研究者規範との相克が問題となる。ここでは「地位や立場にとらわれず、研究者同士が対等に議論をすることで、科学的真理に到達できる」「科学研究の学問的価値の評価は客観的・普遍的な基準によって評価できる」という設問によって規範の共有の程度を計った。

いずれも高い割合で科学の普遍性への信頼が共有されており、この結果はインタビュー

一調査での内容と一致していた。「地位や立場にとらわれず、研究者同士が対等に議論をすることで、科学的真理に到達できる」は95%、「科学研究の学問的価値の評価は客観的・普遍的な基準によって評価できる」は、薬学、農学の分野の研究者で高く、数学で低い傾向があった。

年齢、性別、職位による有意な差は無く、いずれも高い傾向が見られ、年齢による規範意識の差を想定したが外れる結果となったが、領域による違いが確認された。

- ・農学はすべて高い傾向を示した。
- ・数学はすべてにおいて低かった。
- ・工学は、どの領域でも概ね平均的な値を示した。

④研究者として育ってきた経験

- ・研究活動・研究テーマ：6割が指導教員の研究テーマの一部を分担していた。
- ・「研究室のメンバーは毎日一定時間、研究室に居るきまりがあった」とした者は回答者の4分の1と少なかった。
- ・「日常的な研究活動は、他のメンバーと一緒にでなくても単独で遂行できるものだった」と答えた人は9割弱だった。

これらの回答について、性別、年齢では有意な差が見られなかった。講座制タイプの研究室で育った研究者では、「指導教員の研究テーマを分担」「一定時間研究室にいるきまり」が有意に高く、一人の教員が指導するタイプの研究室で育った研究者では、「単独遂行が可能」が有意に高かった。

- ・研究室の雰囲気：8割がサポートティブな研究室での研究を経験していた。
- ・女性研究者は、サポートティブな研究室経験が比較的lowだった。
- ・年齢が高いほど「指導教員がいるセミナーや報告会では、誰でも自由に意見が言える雰囲気があった」が高く、「研究成果が出ないと、指導教員から厳しく咎められることがあった」が低かった。
- ・「指導教員は学会発表や論文投稿の費用を援助してくれることがあった」は年齢が低いほど多かった。
- ・講座制タイプの研究室では、「費用援助」と「指導教員よりも先輩から研究の進め方や

考え方を教えてもらった」は高いが、「異議を唱えられない」も高かった。

- ・「自由に意見が言える」が工学、農学で低く、理学で高かった。「費用援助」は工学、獣医学で高く、農学で低かった。
- ・指導教員との関係は、全体で7~8割は良好な関係があった。男性の方が「指導教員は、将来のことや私生活のことを気軽に相談をできる人だった」が高く、「指導教員は人格的にも尊敬できる人だった」も男性に高かった。「気軽に相談できた」は工学でやや高かった。学位別には「指導教員は研究に対して熱心な人だった」が理学、医学に高かった。
- ・講座制タイプの研究室、工学系研究室では、サポートティブだが、自由度は低かった。
- ・女性は、男性ほどにはサポートティブな環境も、指導教員との良好な関係も経験していなかった。

考察・まとめ

- ・自然科学研究領域のサブカルチャーの一部はアンケートによっても確認できた。その中には、ハラスメントと結びつきやすいと思われる要素が認められた。
- ・研究者規範については、研究分野での差異はあるが、性別、年齢、職位などの要因が働かず、自然科学分野の研究者はかなり同質性が高い集団といえる。数学、土木・建築は研究環境の構造そのものが特徴的で、他分野とサブカルチャーを共有していない部分が多い。
- ・過去の経験において多くの研究者が概ね良好な環境、人間関係を築いていた。これが、どのような条件下でハラスメント的な関係に転化するのか、被害体験や他分野との比較など枠組を変えた調査研究が今後の課題である。
- ・オーサーシップについては、4分の3が研究業績を海外雑誌に掲載しているにもかかわらず、日本のトップ大学の自然科学系（医学系をのぞく）の論文には、厳格に言えば85.9%、より緩やかに適用すれば29.3%の著者が基準を満たしていなかった。我々は、著者基準を満たしていない論文が多いのは一部の分野に限られた慣行

と予想したが、著者数3人以上の論文では、どの（自然科学系）分野でも行われているということがわかった。基準を満たしていない著者は、ミドル・オーサーとラスト・オーサーに多く含まれる傾向にあった。

- ・38.8%の人がギフト・オーサー問題を認知していた。その中の圧倒的多数の人がギフト・オーサーを問題だと考えているが、ギフト・オーサーが存在する理由として、人間関係や慣習、人から指示されるなどの様々な理由があげられていた。
- ・回答者のうち、約45%の人が1年以上の海外での研究歴を持っていたが、海外経験の有無はオーサーシップ問題の認識には影響していなかった。14.8%は「作業をした」だけの人をファースト・オーサー以外の順位で著者に入れていることもわかった。
- ・今後の課題としては、医学部の研究組織やサブカルチャーの構造（欧米では議論はバイオメディカル中心）、理念系・日本の大学に特殊な「講座制」問題の掘り下げ、文系との比較などが残されている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2件）

1. 湯川やよい・横山美栄子・北仲千里

「自然科学研究サブカルチャーとアカデミック・ハラスメント（1）：ハラスメントの背景としての研究スタイル・研究規範」

日本社会学会一般研究報告、2011年9月17日、関西大学

2. 北仲千里・横山美栄子・湯川やよい

「自然科学研究サブカルチャーとアカデミック・ハラスメント（2）共同研究におけるオーサーシップ問題とアカデミック・ハラスメント」 日本社会学会一般研究報告、2011年9月17日、関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北仲 千里 (Kitanaka Chisato)

広島大学 ハラスメント相談室 准教授

研究者番号：60467785

(2) 研究分担者

横山 美栄子 (Yokoyama Mieko)

広島大学 ハラスメント相談室 教授

研究者番号：50 259660